

山と博物館

第58巻 第9号 2013年9月25日

市立大町山岳博物館



ライチョウの羽を拾って観察する子どもたち(立山室堂にて)

双方の発展を目指して

—博物館と友の会の試み—

千葉 悟志

「この羽はなんの羽なんだろう?」子どもたちが、手にとり、興味津々に眺めています。これは、今夏、山岳博物館と大町山岳博物館友の会などが共催で開催した「宮野典夫館長といく親子でライチョウ観察ツアー」の一幕です。このツアーでは、保護者の方といっしょに五人の子どもたちにご参加いただきました。子どもが保護者と行事に参加することは、特段、珍しいことではないのかもしれません。ところが、友の会の事情は違っていました。

大町山岳博物館友の会は、現在三百名を超える会員が登録されています。しかし、十年前と比較すると会員数は半減し、減少傾向に歯止めがかかる状況になりました。特に子育て世代の加入件数は極端に少なく、昨年は、中学生以下の子どもを持つファミリー会員の参加は見られませんでした。次世代に友の会を託すこともままならない状況に陥りつづったのです。博物館はこの状況に気づくことができていませんでした。最大の理解者で、サポート力のある友の会会員の減少は、博物館の教育普及活動の場を狭め、それが博物館の魅力の低下につながるという危機感に欠けていたのかもしれません。

そこで、双方で現状を認識する機会を設け、今後について何度も話し合いを行いました。そこでは、新規会員の獲得につながり、これまで参加が見られなかった現会員も参加したくなるような行事の立案について、また会員のメリットとなる価格設定や特典についても話し合われました。

そして今年度、少數ではありますが、新規加入のファミリー会員があり、現会員の参加者にも新しい顔ぶれがみられるようになりました。実施した行事にもご満足いただけているようで、特に講師のほかに数名の芸術家が同行し、それぞれの専門分野から違った切り口で解説する機会を設けたことが好評につながったようです。子どもたちのにぎやかな声が聞こえてくる、それを見守る大人たち、再びそのような活気ある友の会、そして博物館に発展させられるように、今後も企画立案に力を注いでいきたいと思います。

(市立大町山岳博物館学芸員)

大町山岳博物館友の会事務局担当

画家たちが描いた観光ポスター

—昭和30年代を中心に—

千田 敬一

描いた原画をもとに、網点による印刷だけではなく凸版やシルクスクリーンなどの技術を使い、作者の実感が画面に溢れる観光ポスター

中信地方の観光印刷物の歴史を顧みると、江戸期の広重・英仙による浮世絵版画(木曾街道六十九次)が頭に浮かんでくる。絵師たちは実際に旅をして現地で下絵を描き、その実感を浮世絵版画として再構成した。絵師が現地で見た感動が、二百年あまりの時を経た現在も版画を通して伝わってくる。

明治後半になると画家が中信地方を訪れ、山中に踏み入り現場で山岳を写生した。彼らの山岳画や、山歩きの関係書籍により北アルプスの紹介がなされた。

敗戦前、中信地方に山岳画を描きたいがために県外から移住してきた若い画家が何人かいた。戦時中、絵描きは「遊民」と卑下された。まして兵隊として召集されない若人が絵を描くには、現在考えられないような劣悪な環境であつたろう。彼らは乞食に近い生活を続けながら、画材など無い状況の中でも工夫して絵を描いた。彼らは来たり者であつたが故に、無視という形で容認されたのかもしれない。

昭和20年代後半から、彼らの中に絵が売れないでのそれまで関わってきた特技を生かし、副業に地元の印刷会社や、自治体、商店から依頼され観光ポスターなどのデザインを手掛けける人が現れた。



三ツ橋良二「雪の大町」



古市幸利「信濃大町」



原田壽雄「鹿島槍ヶ岳」

が多数制作された。余談になるが後年小説家として知られた松本清張も、当時は絵を描いていた。

地元出身の画家、デザイナーたちが、昭和26年頃に松本で商業デザイン研究会を結成、商

業ポスター展を第9回展まで開いた。この研究会に古市幸利、勝野宏、小林茂男、酒井忠彦、白鳥往宏、関喬夫、西澤洋、柳沢健、小

穴竹豊、山田三郎、

日本画の横山彦芳、荻久保春雄などが参加した。この商業ポスターの需要があつたが、50年代に入ると写真ポスターに取って代わられた。

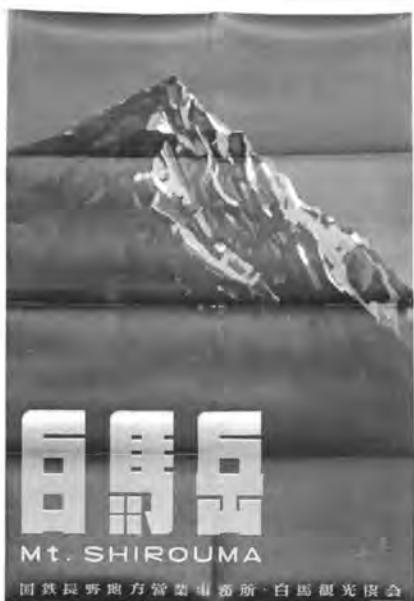
平林和雄(1932-)は大町市出身、大町高校美術部に在籍し油絵を描いていた。現在の大町高校の校章を在学中にデザインした。昭和電工に勤め、転勤で20歳代後半から県外に転出した。

南部道雄(1933-)は大町出身。大町高校美術部で大貫悌二に油絵を学ぶ。その後小林邦などにも学び25歳頃まで画業に専念したが、現在は洋服店を経営。

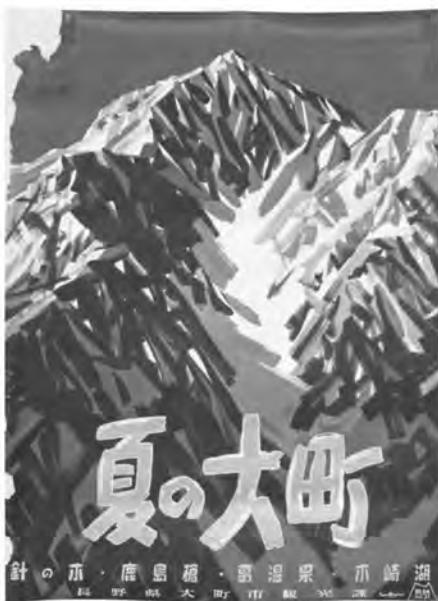
中信美術会にも昭和30年第8回展から第五部(写真と商業美術)が設置された。第五部の商業美術には大町市から平林和雄(大黒町)、堅(北原町)が参加した。丸山堅の経歴は不明。

原田壽雄(1922-)は東京出身、8歳のとき大町の原田家に養子に入つた。18歳の時から自宅の映画館・大町劇場の映写技師や映画看板制作に携わる。戦後は独立して「原田美術装飾店」を開業しデザイン関係のあらゆる仕事をこなした。大町市では昭和40年代まで絵画使ったポスターの需要があつたが、50年代に入ると写真ポスターに取って代わられた。

平林和雄



三ツ橋良二「白馬岳」



三ツ橋良二「夏の大町」



三ツ橋良二「白馬」



古市幸利「雪の白馬」



古市幸利「北アルプスと美ヶ原高原」



三ツ橋良二「白馬」

かつて筆者は木曾福島の木曽路美術館で三ツ橋良二(1919~2003)のポスター展を見た。三ツ橋は、東京に生まれ戦争中に本曾に疎開し本曾中学に通った。戦後、長野や木曾に住み山岳画を描き、それをもとに信州を紹介する観光ポスターを多数デザインした。その後、帰京して科会の洋画部会員となり作画の傍らデザインの仕事を続けた。

古市幸利(1918~1994)は、香川県の生まれ。絵が好きだったが画家として独り立ちするまで伝つてを得て、大阪の大正製薬や三星会の宣伝部でデザインの仕事をしながら絵の勉強を続けた。山に魅せられ昭和18年に松本に移住、食うや食わずで業に専念する。戦後は、生計を立てるため観光ポスター原画の制作も手掛けた。商業デザイナーフェスティバルの指導的立場にあつた。

井口加素巳(1935~)は大町市出身で、大町高校美術部で大貫に油絵を学ぶ。武藏野美術学校卒業後は、帰郷して画業を続けながら大町の東洋紡で一時期絵を教えていた。その後、松本にて「アドデザイン」を設立した。中信美術会第五部には、商業デザイン研究会参加者的一部の人も出品した。第五部の展览会を何回か開く中で、画家側から絵画とデザインの両立は絵画制作に良い影響を与えるとの意見が出た。ポスターは伝えたい要素を見る人に一日で理解させなければいけないが、絵画は観覧者に作家の実感を追体験することを要求する。前記以外に、中信美術会には会場確保の問題もあつたが昭和34年の第12回展を最後に第五部は解消した。この頃から商業デザイン業界は専門化し写真を使ったデザインが主流となり、画家が余技で続けられる状況でなくなつていた事もある。

井口加素巳(1935~)は大町市出身で、大町高校美術部で大貫に油絵を学ぶ。武藏野美術学校卒業後は、帰郷して画業を続けながら大町の東洋紡で一時期絵を教えていた。その後、松本にて「アドデザイン」を設立した。中信美術会第五部には、商業デザイン研究会参加者的一部の人も出品した。第五部の展览会を何回か開く中で、画家側から絵画とデザインの両立は絵画制作に良い影響を与えるとの意見が出た。ポスターは伝えたい要素を見る人に一日で理解させなければいけないが、絵画は観覧者に作家の実感を追体験することを要求する。前記以外に、中信美術会には会場確保の問題もあつたが昭和34年の第12回展を最後に第五部は解消した。この頃から商業デザイン業界は専門化し写真を使ったデザインが主流となり、画家が余技で続けられる状況でなくなつていた事もある。

ポスターは、昭和30年代頃まで図案や商業美術と言われ純粹絵画より格下の消耗品と考えられた。それゆえ当時のポスター現存数は少ないと考えたが、半世紀を経ていたにも関わらず作家や遺族のもとにポスターが保管されていた。画家たちが日本アルプスを題材に制作した観光ポスターは、新鮮さを失つていない。それは彼らが日々仰視していた山岳の実感を表現に取り込もうと、原画制作のため

山中の制作現場に逗留し眼前にある山岳に対し信仰に近い思いを込めて制作したからであろう。その実感が、今もポスターに宿っている。画家が描いたポスターを注視すると、サインが入っているものが多い。画家はポスター制作に使う目的で絵を描いた場合も、絵画制作と差別しなかった。その思いが、作家や遺族とともにポスターを残存させた。

松本の里山辺にある桂重英美術館の遺族

のもとにもポスターが残されていた。桂重英（1909～1985）は、新潟生まれ。昭和10年まで新潟で絵を描いていたが、それ以後は生計を立てるため昭和30年まで新潟と東京に移り、昭和41年に山岳に憧れ松本に移住する。それを機に絵画制作に重点を移した。桂は自作ポスター以外にも、昭和30年から40年代に従事した。しかし桂は絵に対する想いが断ち切れず、昭和41年に山岳に憧れ松本に移住する。

銀座にデザイン事務所を持ってデザインに専念した。桂は絵に対する想いが断ち切れた。しかし桂は絵に対する想いが断ち切れた。

桂は自作ポスター以外にも、昭和30年から40年代に従事した。しかし桂は絵に対する想いが断ち切れた。桂は自作ポスター以外にも、昭和30年から40年代に従事した。しかし桂は絵に対する想いが断ち切れた。

奥田郁太郎（1912～1994）は、東京生まれ。川端画学校で学んだ。安井曾太郎に師事、昭和15年一水会に初入選、昭和17年に青木湖、中綱湖に逗留し絵を描く。その後、北城村（現・白馬村）に移り住み山を描いた。画業に専念し、清貧に甘んじ伴侣を娶らなかつた。昭和29年に一水会を離れ、同34年に松本に移る。ポスターは、今回掲載した昭和50年代に制作したと思われる《白馬岳》一枚しか確認していない。

（日本近代美術史家）



桂重英「梅池高原スキー場」



奥田郁太郎「白馬岳」



桂重英「梅池公園へ」



古市幸利「日本アルプス燕岳へ中房温泉へ」

